

日本ヴァレリー研究会、青山学院大学、1995年6月10日（土）

レオナルド・ダ・ヴィンチを読むヴァレリー（発表要旨）

今井 勉（東京大学大学院）

ヴァレリーはレオナルドの手稿をどう読んだか。『序説』中の三つの引用句を例に、レオナルドの原文脈とヴァレリーの文脈を比較しつつ、「同一化」あるいは「ヴァレリー化」の経験について考察したい。第一に *《Hostinato rigore》*。大地を耕す「鋤」のデッサン（リヒター版所収）と共に記されたこのレオナルドの銘句は忍耐や努力（飽くなき厳格）に意味の力点が置かれているのに対し、ヴァレリーは忍耐・努力のテーマを取り込みつつも「正確さ」（飽くなき厳密）に力点を置く場合が多い。正確さへの熱狂は青年期ヴァレリーの倫理規範である（「正確さの光は諸々のイドラを殺す」）。第二に *《Facil cosa è farsi universale!》*（普遍的になるのは容易なことである！）。絵画方法論を説くレオナルドの原文をヴァレリーは感嘆符付き格言的詩句の形に凝縮加工した。両者の文脈の差異は大きい。ヴァレリーは、方法論のレベルで、構造的類似を想像可能性の根拠とすること（「萌芽」を持つ「一種の同類」である我々にとってレオナルド的精神の想像は可能だとする考え方）を学ぶ一方、倫理的・実存的レベルで、自我革命（特殊自我の消去と普遍自我の希求）の叫びまたは思考の法則を把握して「極限」を超えたい欲望の叫びとしてこの言葉を「ヴァレリー化」している。第三に *《Louange éternelle au nid où il naquit!》*。「飛ぶ人間」が実現しない現在の絶望とやがて実現するであろう将来への希望が混ざりあって稀な高揚を示すこのレオナルドの叫びに、ヴァレリーは自らの「未完了の労苦」を重ねて想像的に同一化している。最後の感嘆符は、レオナルドの叫びが他ならぬヴァレリー自身の叫びであることを示す符牒である。以上の考察から明らかなのは、『序説』を書くヴァレリーにとってレオナルドの手稿は倫理的・実存的参照体系として決定的に重要な位置を占めるという事実である。